

日々の子どもたちの声を行事に反映 “えんげいかい” までの道

取組の背景・目的

子どもの意見聴取・反映の取り組みとして、定例の「子ども会議」の取り組みがある。しかし、会議に出席できない子の意見や、普段の何気ない会話など日常のやり取りの中で生まれた“やりたい気持ち”を大事にして事業に反映したい、という職員の思いがあった。

きっかけは、月例のテーマ工作（毎月1週間程度実施。年度初めは1年生向けに取り組みやすい工作や、日常的には出来ない工作などを行う）で『木のコマ作り』を行った事からはじまった。

コマ台を使った長回し競争やコマバトルが男子の間で流行し、毎日のように遊んでいた。そこで、「コマ大会やりたい！」という声が出た。

「どういう大会やりたいの？」という話になり、「子ども実行委員でも作る？」「俺、リーダーで、お前キャプテンね！」「なら僕は班長」（笑）というようなやり取りからスタートした。

結果、ルール・チラシ・ポスター等を子どもたちも作成し、土曜日に保護者も交えて大会を行い、大いに盛り上がる事が出来た。児童館の特性として、様々な小学校からの来館があるという事で、学校も地域も違う保護者同士の交流も実現した。その時参加した保護者と子どもたちが、地域行事で自主的に「コマコーナー」を出展したという事もあった。その際はコマを作る・遊ぶ上でのノウハウを指導した。

「やろうと思ったことが出来た！出来る！」この行事をきっかけに、子どもたち、そして職員にも意識改革が起きた。職員集団としても、「今、これが盛り上がっているから子どもたちを後押ししよう！」「翌月の行事に反映させよう！」「いや、お知らせに載ってなくても今出来ることはやろう！」という機運が高まっていった。

取組の概要

- 【開催名】 えんげいかい
【開催日時】 令和8年1月8日（木）
午後2時～4時
【場 所】 地下プレイルーム



これまでの流れで、月例行事にとらわれず、日々声を反映させた短期スパンでのイベントを積んできたためか、「カラオケやりたい」「手品やりたい」「ダンスしたい」「コントやりたい」と、子どもたちの“やりたい”が沢山積み重なってきた。では、「皆でお互いの“やりたい事”を見せあおうか？」と、“えんげいかい”を計画。子どもたちから出た「ミラーボールとかない？」という意見で、他館へ打診しミラーボールと照明を借用し、工夫して設置した。

当日はカラオケ、クイズ、ダンス、コント、けん玉、手品、弾き語り、地域の方のハンドベルも出演があった。職員も出し物を行い、子どももおとなも、「自分の好きな事をやっていいのだよ」という事を伝える事が出来た。

工夫点・留意点

今回の“えんげいかい”は、個人が目立つ内容である事から「ひとり一人がやりたい事をする」「他の人のやっている事を認める」の2点を大事にした。“えんげいかい”を機会に、自分を大事に、友だちを大事にしていこうという事も伝えていった。

そして、「おとなも、子どもと一緒に楽しむ」事。これについては、児童館の年間運営目標にも明記してあり、おとなも楽しむ姿を見せる事で、館内に「おとなも子どもも一緒だよ」という仲間の輪を広げる、また、地域の方に子どもたちに興味を持ってもらうという目的があった。ゆえに、同じ建物内で懇意にしていだきしている原町住区住民会議（目黒区独自のまちづくりの手法として、区の提案に応じて地域住民が主体的に組織する団体）の役員に意図を説明し、参加していただいた。当日は役員3名、原町住区住民会議会長含め4人がハンドベルを披露してくれた。当日の順番を迎えるまで、ハンドベルをやる事は児童館職員にもシークレットで、まさにおとなも子どもも皆で楽しく実施出来た。また、柔軟な運営という一環で、開催中の飛び入り参加も可とした。参加を迷っていた子が急きょ漫才で参加した。

取組の効果

子どもから地域のおとなまで、皆で楽しくできた事で、館内の雰囲気は良くなった。意外なコンビでのダンスや、職員と子どもが混じってのコント、仲良しのデュエット、仲良しトリオのアイドルダンスなどで、「楽しいね」「すごいね」という感情を共有出来たことが大きかったと思われる。



参加した子、見た子もそれぞれ、「次はいつやるの?」「また、手品したい!」「俺も次は出ようかな…」等の声があったり、参加された住区住民会議の方々も、「また同じ内容じゃつまらないな…何にしようか?」と楽しみにしてくれていたりする。

職員集団としても、これまで子どもの声を拾って、小さな行事を重ねてきている。その経過があった上での開催で、子どもたちの表現の場が設定できた充実感があった。

課題・今後の展開

言うまでもなく、子どもたちは一人ひとりが忙しく、皆が参加できる日程の調整が難しかった。それはおとなも同じであり、今後は保護者の参加も促したいので、日程調整は課題である。

今回は、短期間で実現した事と、参加したい子どもたちが多かった事もあり、子ども実行委員会形式はあえて取らなかった。今後は計画から子どもたちと考えるいきたいが、まずは“参加したい”子どもたちの気持ちを大事に開催していく。運営側に興味のある子もいるので、丁寧に対応していく。年度内の再開催を目標とする。定例開催とするかは、日程調整と合わせて実践しながら考えていく。

職員としては、事前に日々子どもたちとの良好な関係を作り、子どもたちの思いを吸い上げ、形にしていく実践力が必要である。また、当日は臨機応変に動ける実践・運営力が必要である。